

キコニアレター

2022.3.15発行 No.29

第6回 コウノトリ未来・国際かいぎ ～つながる!いのち・地域・こころ～

人とコウノトリが共生していける社会環境の実現を目指して、これまでの野生復帰の取組を振り返り、これからの野生復帰の未来を議論する『第6回コウノトリ未来・国際かいぎ』が10月30日・31日に開催されました。その中で、議論・発信された内容の一部をご紹介します。

1日目の基調講演では「いのちをつなぐ共生社会ーゴリラに学ぶ」と題して、ゴリラ研究の第一人者である京都大学名誉教授・山極壽一氏に講演をいただきました。



山極壽一氏

ゴリラからは、生物には一体一体個性があり、その個性や歴史、命のつながりを知ることが大切であり、その命は進化した場所で輝くことを教えられました。

現在、ヒトは、その数を100年間で4倍に増やし、さらに家畜を大きく増やすことで地球を荒らしてしまいました。地球環境は限界に達しようとしています。

自然は常に変化しています。その中で、命は繋がりが輝いているが、人間は、それらの命を自らのリズムと動きに同調させようとしています。

これからは、文化と科学が共鳴し合う新たな環境倫理を作り上げる必要があります。地球環境をOne Healthと見立てて様々な命が共鳴し合うよう生態系を構築し、山・森・里・川・海の循環を見定めてその流れを良くすることによって利益を得るといった、文化を作り上げていかなければならない時代ではないでしょうか。

セッションIでは、これまでの野生復帰の成果と今後の課題が明らかにされました。さらに、再導入の世界的な歴史や韓国での野生復帰の取組が紹介されました。

<江崎保男・郷公園長からの報告>

2011年策定のランドデザイン短期目標のうち残されていた課題、すなわち野外個体による盗餌防止に成功しました。また、中期目標である国内メタ個体群構造構築への手がかりを得ることができ、科学に基盤を置くコウノトリ野生復帰は着実に前進しています。



江崎保男園長

一方、現在コウノトリは各地域に飛来した際に歓迎されているものの、大型の餌、特に淡水魚がいない地域にコウノトリが定着すると、希少小動物を絶滅させる可能性もあります。科学的に現状をとらえ、近過去のハビタットを再生するためにも森・川・海、及び水田の水系つながりを復活していく事が必須です。川が豊かになり、淡水魚を食べる文化が復活することが何よりも望まれます。

官民学が連携し、かつてのように樹木にコウノトリが営巣し、ヒトとコウノトリが共生することにより、生物多様性の保全が叶う「真の野生復帰」に向け、新たなステージに胸を進めたいです。県立コウノトリの郷

公園という研究機関が位置する但馬地域は、その良きモデルとなる必要があります。

セッションIIでは、県立人と自然の博物館館長・中瀬勲氏、青山学院大学教授・福岡伸一氏、上智大学教授・あん・まくどなるど氏らによるディスカッション「共生の社会を目指して」が行われました。

<中瀬氏>但馬の野生復帰事業の印象は?

<まくどなるど氏>豊岡に初めて来た1995年に、減農薬や無農薬を農家と共に考えましたが、「収穫量が減ってしまう」などの意見が強く、最初は理解してもらえず、生き物たちに対する愛情をあまり感じませんでした。しかし、2005年の放鳥後に来たときは、愛をいっぱい感じました。そして、農業者の地道な活動に感動し、それを支える行政や大学などが協力して生き物に対する愛が育まれていました。



<福岡氏>豊岡での取組は素晴らしいです。野生復帰のためには、なぜいなくなったのかをきちんと考える必要があります。壊すのは一瞬ですが、再構築には時間がかかります。そして、昔に戻すのではなく、新しい形が必要となります。

<まくどなるど氏>農業は、よく生産者の責任と言われますが、消費者にも関係があります。どのように生産されたものを選ぶのかを消費者が考えなければなりません。

<中瀬氏>共生のために必要なヒントは?

<まくどなるど氏>ローカルで活動することは大切ですが、その活動が他県や他国の自然環境や社会に影響しているのかをグローバル市民として考える必要があります。セッションIで、コウノトリが韓国・日本間を渡っている話に感動しました。人間は境を作るのが好きですが、コウノトリに学び、国境を越えて自然界と共生できる人や世界になれば良いですね。

<福岡氏>コウノトリは昔平和に暮らしていましたが、ヒトによって生態系を追いやられて絶滅に瀕しました。地球に人間は不要ですが、人間に地球は必要不可欠です。だからまず、人間が地球環境に対して共生していかなければならないと謙虚になる必要があります。生き物の大切な原則は種の保存。しかし人間だけがその原則から自由になり、種よりも個を大切にしており、それが人間の価値を高めています。と同時に、70億の個が自分の命を維持するために地球環境に負荷をかけています。生き物は利他的です。人間も地球環境の一員として他の生き物の声に耳を傾けていく事が大切です。

コウノトリの個体数 (2022.1.31 時点)

飼育

施設・拠点名	オス	メス	不明	計
兵庫県立コウノトリの郷公園	29	29	0	58
附属飼育施設コウノトリ保護増殖センター	16	19	0	35
養父市伊佐拠点	0	0	0	0
朝来市三保拠点	0	0	0	0
計	45	48	0	93

野外

カテゴリー	オス	メス	不明	計
兵庫県放鳥	17	16	0	33
兵庫県野外巣立ち	59	80	0	139
野生個体	0	1	0	1
他府県放鳥	12	6	0	18
他府県野外巣立ち等	24	38	0	62
計	112	141	0	253

未来を生きる子どもたちの声

～コウノトリからつながった地域と命の輪～

2日目のセッションⅢでは、ラムサールセンター副会長・中村大輔氏の進行の下、コウノトリが暮らす地域の子もたちが思いや、輪を広げていくための取組を語りました。



栃木県小山市 下生井小学校

コウノトリを自ら調べて、歴史などをまとめて多くの人に見てもらいました。コウノトリがこの地を選んだことが嬉しく、これからもヒトとコウノトリが共に栄えられるように考えていきたいです。

千葉県野田市 福田第一小学校・福田第二小学校

学校での自然体験活動を行い、田植え体験では、水の冷たさや作業の大変さを知り、田んぼのぬるぬるした土に驚きました。コウノトリや多くの生き物が住み続けられる自然を大切にしていきたいし、飛来先で自然を守る取組が広がってほしいです。

福井県越前市 白山小学校・坂口小学校

年4回生き物調査をして、田や用水路、退避溝に生き物が昨年度より増えてきていることを実感しました。また、外来種について学び、実際に駆除をしました。コウノトリだけを守るのではなく、その周りの自然環境を守ることが大切だとわかりました。

島根県雲南市 西小学校

田んぼでエサ探しや、観察カードを使って毎日コウノトリの観察を行っています。それらのコウノトリ目撃情報をまとめ、地域に発信する活動を今後も続けていきたいです。

兵庫県豊岡市 コウノトリKIDSクラブ、KIDS+

網やトラップを使った湿地での生き物調査を行っています。生き物の住処づくりのための湿地での

活動を今後も続けていきたいです。現在行っている様々な活動を、多くの方に伝えて、知ってもらい、好きになってもらう取組を大切にしたいです。

最後に兵庫・豊岡宣言をコウノトリKIDS+の大井琴華さんが行いました。



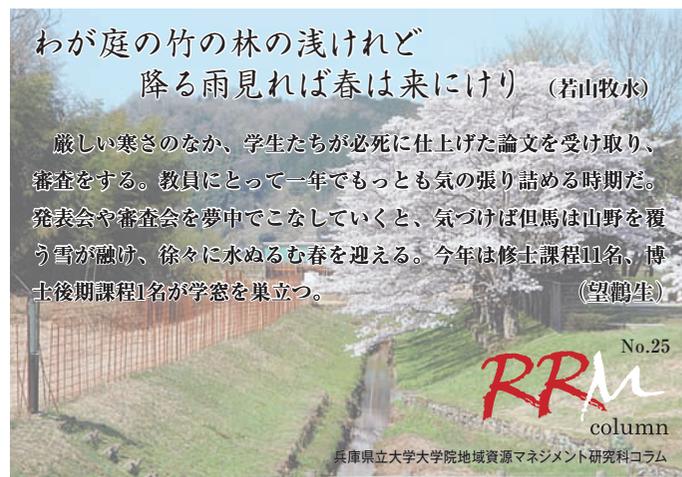
(前略) 私たちはこの会議を通じて多くの先人のたゆまぬ努力、大きな愛情、そして未来への願いがあって、コウノトリがいる素晴らしい風景を見ているのだと改めて感じました。

コウノトリと共に生きる私たちが進む道では、ヒトと自然や生き物との間で、様々な葛藤やすれ違い、矛盾が生まれます。その時、自然や生き物に対して私たちがとる態度や行動によって地域の未来が決まっていきます。コウノトリを再び絶滅への道に追いやることがあってはなりません。それは、私たち自身の暮らしや命を脅かすことになるからです。

コウノトリでつながった地域が取組を続け、心を一つにし、人やコウノトリを始めとする生き物が、共に生きる社会を作っていかなければなりません。今、このコウノトリが生きている風景の先に確かな未来があると信じます。

わが庭の竹の林の浅けれど 降る雨見れば春は来にけり (若山牧水)

厳しい寒さのなか、学生たちが必死に仕上げた論文を受け取り、審査をする。教員にとって一年でもっとも気の張り詰める時期だ。発表会や審査会を夢中でこなしていくと、気づけば但馬は山野を覆う雪が融け、徐々に水ぬるむ春を迎える。今年も修士課程11名、博士後期課程1名が学窓を巣立つ。(望鶴生)



No.25
RRM
column

兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科コラム

創始個体ペアの繁殖 (飼育下の2ペアから4個体が誕生)

2021年4月5日、6日にコウノトリのヒナがふ化しました。さらに、6月3日にも2羽のヒナがふ化しました。コウノトリの郷公園では1989年以降毎年コウノトリのヒナが誕生しています。また、最近では6年連続で新たなペアが形成されています。今年誕生したヒナも親鳥は新たにできた2組のペアから誕生しました。兵庫県では増殖事業開始時からコウノトリの飼育方法や繁殖技術の研究を行っており、様々な課題に対応してきました。しかし、未だにコウノトリはペアリング（ペアを作ること）が非常に難しい種と言われており、全国の飼育施設でもペアを作ることが飼育の課題の一つになっています。

また、ペアを作るうえで重要になるのが遺伝的多様性を考慮した組み合わせを考えることです。国内で飼育されているコウノトリ個体群は26羽の遺伝子が元となっており、その個体は創始個体と呼ばれています。現在では海外からコウノトリを導入することが難しく、そのため限られた国内の飼育個体の中で遺伝的多様性を少しでも高めていく必要があります。2020年までに26羽の創始個体のうちの24羽がペアになり遺伝子を残



創始個体ペア(BLペア)のヒナ



BLペア 親子写真

してきました。そして残りの2羽が先ほど述べた2組の新たなペアであり、2021年は国内の創始個体すべてが遺伝子を残すことに成功したコウノトリの飼育にとって歴史的な年となりました。

ペアリングを行うために郷公園では国内のコウノトリを飼育している施設と個体の移動や卵の交換などの連携をとりながら、遺伝的多様性を確保することに努めてきました。また、飼育における繁殖計画は統計ソフトを用いた遺伝子解析に基づき毎年策定しています。

今後は、さらなるペアリング技術の向上を目指すとともに、飼育しているコウノトリの中で遺伝的多様性を少しでも高め、健全な飼育個体群の維持を図っていきます。



兵庫県立コウノトリの郷公園
主任飼育員

FUNAKOSHI Minoru
船越 稔

野外から救護したヒナの里親飼育

2007年、野外で初めて繁殖に成功して以降、親鳥の死亡で巣内からヒナを救護した事例は4例あります。救護したヒナは、飼育下で育て、馴化訓練を施して野外へ解放しています。ヒナを育てる方法は、人が親代わりになり育てる「人工育雛」と、コウノトリの親が育てる「自然育雛」があります。「人工育雛」は、過度に人慣れする可能性があり、「自然育雛」が望まれます。救護したヒナを「自然育雛」するためには、飼育下の親鳥にヒナを托すこととなり、これを「里親飼育」と言います。



里親から見えないように、卵とヒナを入れ替えました。

飼育下では、これまでもふ化後一週間程度の小さなヒナを「里親飼育」した経験はありますが、ふ化後15日齢、800gを超えるヒナを複数羽も親鳥に托したことはなく、親鳥が受け入れるか心配でした。里親となる親鳥は、育雛経験（子育て）豊富な親鳥を選びました。里親は、いきなり卵から大きなヒナに替わり驚いた様子でしたが、恐れていたようなヒナへの攻撃もなく受け入れてくれました。ヒナも、里親が羽繕いや餌を吐き出すとすぐに慣れました。その後は、里親が一生懸命に子育てをして、無事幼鳥を野外へ解放することができました。

野外コウノトリの個体数増加に伴いペアも増加すると予測されます。ペアが増えれば、今回のような育雛途中の親鳥の事故も増加することが考えられます。救護したヒナは、「里親飼育」で育てるのが最も自然で良いとは思いますが、予め里親を手当てしておくことは難しく、このような事例での救護体制構築が今後の課題です。

今日は 何の日?

当園の公式Facebookにて「今日は何の日?」シリーズを投稿することになりました。コウノトリの保護増殖と野生復帰の歴史について、〇〇年前の同じ日に、どのようなことが行われていたのかを発信していこうと思っています。

そのほかにも、日々の園内の様子についてアップしているので、ぜひご覧ください。右のQRコードからも見ていただけるようになっています。



FB



イベント報告

郷公園デー～非公開エリア特別公開～ 10/23(土)、24(日)

普段は入ることの出来ない非公開エリアを一般の来園者に公開しました。園内を回りながらスタンプを集める「郷公園スタンプラリー」、コウノトリの治療室と手術室を公開し、獣医師がコウノトリの健康管理・検査・治療などについて解説する「コウノトリの診療所」、コウノトリの野生復帰を支える飼育活動について、飼育ゾーンで飼育員が解説する「コウノトリ野生復帰の舞台裏」を行いました。

コウノトリの巣作り体験 2/26(土)

当初は昨年11月に行う予定でしたが、高病原性の鳥インフルエンザの影響で施設見学ができず、今年2月に延期となりました。

参加者は木の枝を切って巣台に敷き詰め、実際に飼育コウノトリが使用する巣を作りました。その後、コウノトリ文化館やその周辺を案内し、施設見学をしていただきました。



巣作り体験



郷公園デー



センター特別公開

センター特別公開 11/3(水・祝)

コウノトリの保護増殖・野生復帰の原点である、郷公園附属「コウノトリ保護増殖センター」を公開しました。当センターには、第1フライングケージ(通称:『約束のケージ』)があります。このケージは、国の有形文化財に登録され昨年10月に飼育を再開しました。他にも、コウノトリの飼育現場を間近に見ていただき、各ケージやその中の個体について説明しました。

ふるさとひょうご寄附金でコウノトリ野生復帰プロジェクトを応援してください。

当園では全国の皆さまのご協力を得ながらコウノトリの保護増殖と野生復帰に取り組んできました。しかし、野外コウノトリの増加に伴い、救護個体の増加や近親婚の発生など新たな課題への対応や、遺伝的な多様性確保のため国内外の施設とのさらなる連携が必要となってきています。

これらの取組を進めていくためにも本プロジェクトへのご賛同・ご支援をお願いいたします。本プロジェクトの詳しい内容は、郷公園HPに掲載しています。

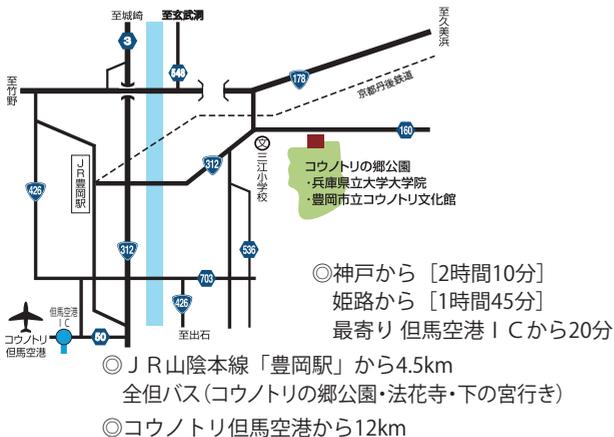
申込方法

1. ふるさと納税サイト「ふるさとチョイス」による申込み
2. 寄附申出書による申込み



ご不明な点がございましたら、郷公園までお気軽にお問い合わせください。

ACCESS!



自然解説員のコラム



ツグミ

今回はツグミについてです。全長は24cm程で、スズメよりも大きい鳥です。背中側が茶色く、腹側が白と黒でウロコのような模様をしています。全体的に目立たない色をしているため地面にいると擬態のようで、なかなか見つけづらいです。

冬鳥で園内では11月頃から見られるようになりました。田んぼで見かけることが多く、てくてく歩き回っています。木の枝に止まったり、柿を食べたりもしていました。昨冬は3月くらいまで姿が見られました。

だんだん暖かくなると、冬鳥は繁殖地へ渡っていき、替わって夏鳥の姿が見られるようになっていきます。季節によって見られる野鳥が変わっていく様子もおもしろいので、ぜひそこにも注目してみてください。

(自然解説員 箸中彩夏)



兵庫県立コウノトリの郷公園
Hyogo Park of the Oriental White Stork

兵庫県豊岡市祥雲寺 128 tel: 0796-23-5666 fax: 0796-23-6538

開園時間: 9:00~17:00
休園日: 毎週月曜日
(休日に当たるときはその翌日)
12月28日~1月4日

e-mail: kounotori@stork.u-hyogo.ac.jp
ホームページ: http://www.stork.u-hyogo.ac.jp
facebookページ: https://www.facebook.com/satokouen/



HP



FB